

論文審査の結果の要旨

氏名：町田 百合絵

専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題名：「F. リストのピアノ作品における標題と音楽の関連性 — 《巡礼の年》をめぐって—

審査委員：（主査）教授 蛭子 麗貞

（副査）教授 池田 直樹 （副査）講師 綿村 松輝

（副査）講師 金澤 正剛

論文「F・リストのピアノ作品における標題と音楽の関連性」は、20世紀以来安易に用いられてきた「標題音楽」という用語に着目し、その用語が生じた背景を調べ、その用語を初めて用いたフランツ・リストが、果たしてそれをどのような意味で用いたかを確認した上で、リストの晩年のピアノ曲から具体的な実例を選んでそれを分析するという、極めて独創的な発想により書かれたものである。

リストのピアノ音楽作品における精神性の高さ、内容の豊かさなど、技巧面以外での価値を再評価することを目的としている。

第1章序では、その具体的な方法として、ややもすれば演奏論のみに偏りがちな先行研究に対して、本論文は標題音楽に焦点を絞り、リストのピアノ音楽では極めて重要な作品である「巡礼の年」全26曲の主題と主題変容の手法に着目し、斬新で緻密な楽曲分析を行い具体的な譜例を示しながら検証している。

この「巡礼の年」は標題音楽研究のみならず、リストの作風の変遷と創作の根底を流れている本質を探る上でも、重要な作品と云える。

本論文、第2章「絶対音楽と標題音楽」では、標題音楽を絶対音楽に対峙させて論述し、その違いを明らかにし、歴史的な背景を確認した上でリストの言葉を引用しつつ、標題音楽の定義付けをしている。その上で、リストの作品における動機の回帰、変容、展開は、詩的理念との関連によって条件づけられていると論じている。絶対音楽が完全に自立的であり、音楽のみで理解されるものという定義付けを行う一方、標題音楽については、歴史としてルネッサンス期から始まり、バロック期、古典派、ロマン派、国民楽派、印象派、20世紀以降までの各時期について詳細に論じている。

リストが、過去の作曲家から如何なる影響を受け、「標題音楽」を一つの様式として完成させたことを分析すると共に、後世の作曲家に与えた影響を考察しており、評価に値する。

第3章「主題および主題変容の概念と実際」では、標題音楽に於いて音楽構成上で重要な要素である、主題および主題変容を考察している。当時の作曲家の具体的な作品の例を挙げながら、描写的、物語的な要素は薄く、ある性格や印象を伴った主題により構築され、その変容により展開されるという、比較的客観性をもった変容と展開であったと結論付けている。

ここでは、ベートーベンのソナタに於ける主題、副主題に続き、ロマン派の大規模な作品を統一する方法として、主題変容とその変遷が論じられている。標題音楽というジャンルを新たな様式にしたベルリオーズの作品を分析し、そこで用いられた「固定楽想」、更にはその手法を引き継いだワーグナーの作品を取り上げ、変容、示導動機を論じている。また、リストによるピアノ編曲版との比較を行い、これらの動機すべてが使われていることを認識したことは、貴重な考察である。

第4章では、リストの標題音楽に対する見解が述べられている。リストの自筆譜の冒頭には序文として、標題の対象となっている文学作品が引用されていることが多い。リストの標題音楽とは、引用された序文そのもの、引用もとの作品の観念のことを指しており、音楽をより分かりやすくするための形式であったことを論じている。更に、リストの標題音楽として非常に重要な位置を占める、交響詩についても述べられており、論文の価値を高めている。

リストはピアノ独奏者としては、音楽史上初めてリサイタルを開き、その超絶技巧で名声を高めた作曲家であっただけに、華やかで音響効果の極めて高い作品も多い。しかし、年齢を重ねるごとに、より精神的な内容の濃い作品となっていく。

第 5 章の「リストのピアノ作品」に続き、第 6 章「巡礼の年」創作期、第 7 章に於いては、主要作品が書かれていた、ヴァイマル期に作曲したと云われる「巡礼の年」について、創作期の足どりと分析を行っている。「巡礼の年」第 1 年、第 2 年と補遺、晩年に書かれた第 3 年、全 26 曲の楽曲分析を行ったことは、今までにあまり例を見ない。この詳細な分析は理論研究者の視点でありながらも、演奏者としての視座を保ちながら行われ、全曲の様相が鳥瞰図的に明らかになっている。この斬新で確かな視点は高く評価される。

そして第 8 章結論として、「標題音楽とは標題を単に音で描写したものではなく、自立した楽曲そのものに作曲者の精神が詩的理念となって反映された音楽である。」「リストのピアノ作品は高い精神性と豊かな内容と理念を持っている」ことを、説得力ある形で見事に論証している。

日本大学海外派遣奨学生として、ハンガリー国立リスト音楽院に留学したことも、論文作成及び演奏面で大きな成果に繋がったと考える。

本論文の音楽事項に関する書式は、日本音楽学会が策定したルールを基準にして書かれており、博士論文としてクオリティを充分満たしている。

よって本論文は、博士（芸術学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成 25 年 9 月 18 日